

ス モ ン 問 題 年 表 (続)

昭和 4 6 年 4 月 ~ 4 7 年 3 月

スモン調査研究協議会 保健社会学部会

飯	島	伸	子
須	田	和	子
片	平	冽	彦
高	木	邦	明

年	医 学 事 項		行 政 事 項	社会および患者の 動向に関する事項	備 考 (公害・薬害・医療事故等)
	患者発生の経過	調査研究の経過			
1971 (昭46)	<p>・疫学部会の全国集計結果ではこの年新たに発生した患者は15名(うち岡山9名)。 (重松ら、47. 2. 27 発表)</p>	<p>4.3 ・新大・椿ら、新潟での疫学調査の結果から、日本でのスモンの発生の増加はクリオキノール(キノホルム製剤)の中毒に起因すると“Lancet”に報告。編集者はこのすぐ後に、スモンとキノホルムとの関係については懐疑的なチバ製薬の見解を掲載。 ・“Lancet”の同号、別の欄にて、スモンは「日本だけのものか?」という題で、キノホルムが世界的に広く使用されている薬であるだけに、スモンとキノホルムとの関係には注目すべきであるという文献を掲載。</p> <p>4.24 京大・井上ら、スモン患者からのウイルス分離結果を“Lancet”</p>	<p>4. スモン調査研究協議会幹事会開催。46年度の研究方針検討され、研究テーマをプロジェクト的にしぼり、疫学・治療予後・病理・キノホルム・保健社会学・微生物の6部会設置さる。</p> <p>6.21 井原 市長、スモン病対策委員会で、6月16日の朝日新聞の、井原のスモンに関する記事に言及し、スモンの原因はキノホルムでないとこたえ、これが翌日の山陽新聞に掲載され問題となる。</p> <p>6.30 スモン調査研究協議会の幹事会で、岡山県井原地区へ疫学班の派遣を決定。 この実施のため事前の打合せに同協議会幹事</p>	<p>4.1 井原支部が結成される。</p> <p>5.26 全国スモンの会支部代表者会議。</p> <p>5.28 第1次スモン訴訟、全国スモンの会会員2名により、国・製薬会社・医師・病院を相手どり、国家賠償法第1条、民法第709条などに基づき総額1億円の慰籍料請求の訴えが、東京地裁に出される。</p> <p>6.16 「岡山県井原地区でもキノホルム多用、ウイルス説に反証」と朝日新聞一面トップに報道。ウイルス説の有力な根拠地岡山県井原地区を朝日新聞記者が調査し井原市民病院でスモン多発当時長期大量にキノホルムを投与していたことを明ら</p>	<p>6. 水俣病患者、天草でも発見さる。</p> <p>6.30 イタイ、イタイ病訴訟、原告勝訴。被告三井金属、ただちに控訴。</p> <p>8.7 環境庁、水俣病患者の認定拒否処分に対する行政不服審査請求に関し熊本・鹿児島両県知事の拒否処分を取消し、再審査を命ずる。</p> <p>9.29 新潟水俣病訴訟、原告勝訴。しかし、賠償金額は請求額の約半分に削られる。被告昭和電工は、9月27日に上訴権放棄の声明を発表。原告も、10月13日に上訴放棄を決定。</p> <p>10. 講談社発行の「小説現代」、サリドマイド児の父親を主人公にした森村誠一の『奇形の札束』</p>

に報告。

同誌にて、ロンドン・Hospital for Tropical Diseases の Marsden ら、椿らの報告に論評を寄せる。米国では多くの臨床医が、ジョードキンを使用するがスモンの発生はみられていない。日本の神経症状と類似のものは、熱帯地方、特にナイジェリアで報告されている。これはシアン化物が関係しているのではないかと記す。

7.3 岡大・島田ら、“Lancet”に井原地区スモンの疫学的所見、ウイルス学的検索からスモンの原因としてウイルスが考えられると発表。

同誌にて、東大・井形、スモン・キノホルム説の研究経過を発表、またイスマエルの“Steinitz、

を派遣することを

決定。

7.2 井原市市長上京し、厚生省に、スモン調査研究協議会保健社会学部会の調査がキノホルムを前提として来るのならば調査に協力せぬと口頭にて申し入れ。

7.17 スモン調査研究協議会、各都道府県スモン対策協議会（仮称・地方協議会）に対し、スモンに関する調査研究の一環とし、スモン患者に対する治療研究事業を委嘱。この事業は46年7月7日より47年3月31日まで実施。

7.7 井原市長、スモン調査研究協議会甲野会長と、同協議会保健社会学部会の宮坂教授にあてて、保健社会の調査に関連し、不審の点ありと

かにしたもの。

6.25 岡山県井原地区の患者らが、スモン調査研究協議会に、調査団派遣の要望書を提出する。

6.25 武田薬品社長は、「サリドマイド、スモン、その被害問題の責任はどこに持っていきようのないもの」とし、また「日本製薬工業協会で、被害者の救済のため、損害賠償責任保険への加入を検討中」と表明する。

7.4 岐阜支部が結成される。

7.17・18 岡山市で開かれた、第12回社会医学研究会総会で、岡山県内のスモン患者らが患者の実情および救済などを訴える。

7.21 第2次スモン訴訟、岡山県井原地区の患者2名が、国・製薬会社・医

を掲載し、サリドマイド訴訟原告側や支援団体から、「被告者の苦悩を踏みにじった行為」と激しい抗議を受ける。

1.0 心臓病薬コラルジル、重い肝臓障害を伴うことが明らかにされる。この薬は、45年11月、製薬会社が肝臓障害を懸念し製造・販売中止済み。患者は1,000人以上と云われる。

1.1.2 サリドマイド訴訟第18回口頭弁論、西独W・レンツ博士を原告側証人として迎え、始まる。証言は11月24日まで13回続けられた。

1.1. コラルジルの被害者、業者と国を被告とし、損害賠償請求訴訟提起。

1.1.2.3 横浜市の「金沢埋立て」計画、地元市民の間で大問題となる。同市内に残る最後の自然海

	医 学 事 項		行 政 事 項	社会および患者の 動向に関する事項	備 考 (公害・薬害・医療事故等)
	患者発生の経過	調査研究の経過			
		<p>イスラエルではキノホルム製剤をよく使用するが、SMON或いは類似の神経症状はほとんどみられないと報告。</p> <p>7.12 スモン調査研究協議会保健社会学部会は、井原市長より市と市民病院の調査を拒否されたが可能な範囲で19日迄井原地区調査を実施。</p> <p>7.24 スモン調査研究協議会キノホルム部会、第1回研究会開催。</p> <p>・キノホルムが神経にとりくまれ、特に末梢神経に長期間残留する事実が、岡大・大月、緒方ら、東大・高須、豊倉、放医研・松岡ら、新大・椿ら、九大・黒岩らの動物実験で確認された。</p> <p>・東大・田村ら、キノホルムを飲まないのにスモンにかかったという患者の血液をガスクロマトグラフで調</p>	<p>して納得ゆく説明をするよう文書によって申し入れ。</p> <p>7.12 7月8日ごろより岡大第一内科に入院中の井原市長、この日スモン調査研究協議会保健社会学部会の代表の訪問を受けるが、市と市民病院の調査はことわる。</p> <p>12.2 岡山県、県下スモン患者230人に対し、46年4月から47年2月までの治療費のうち自己負担分8割につき、県と国が援助することを決定。</p>	<p>師および岡大 第1内科の教授、助教授を相手どり、総額1億円の慰籍料請求の訴えを東京地裁におこす。</p> <p>7.23 第1次スモン訴訟、第1回口頭弁論開かれる。裁判長はスモンとキノホルムとの因果関係の立証について、財力・権力を持つ被告(国・製薬会社・医師)に協力を求める。原告はカルテなどの証拠提出の申し立てを行い、「審理を1日も早く」と発言する。</p> <p>8.28 全国スモンの会支部代表者会議。</p> <p>9.13 岐阜でスモン患者、入水自殺(女65才)。</p> <p>9.19 埼玉支部が結成される。</p> <p>9.27 岡山県井原市で、「スモン病の原因究明と患者救済を求める市民集会」が開かれる。</p> <p>10.1 栃木支部が結成される。</p> <p>10.12 岡山支部が結成される。</p>	<p>岸までも工場用地用に埋立てるという計画。</p> <p>12.6 新認定水俣病患者・家族上京し、チッソ東京本社と直接交渉の試み。交渉なりたらず8日より、本社前で坐りこみを開始。</p> <p>12.10 イタイイタイ病患者、三井金属に抗議の自殺。</p> <p>12.28 日本アエロジル四日市工場の塩酸たれ流し事件、再調査の結果、不起訴処分決定。</p>

べたところ、極微量だがキノホルムを検出したと報告。

8.5 スモン調査研究協議会、微生物部会第一回ウイルス研究会開催。

・ 京大・井上ら、スモン患者からの分離結果と動物実験成績と併せてウイルスがスモンの病因と考えられると報告。

・ 岡大・俵ら、マイコプラズマとキノホルムの犬における併用実験で、病理学的所見を示す主役はキノホルムであるが、症状促進の1要因としてマイコプラズマの関与の可能性ありと指摘。

8.11 新大・椿、東大・井形はヨーロッパ諸国におけるキノホルム使用状況の調査を終えて帰国、空港で「ヨーロッパでもキノホルム中毒による神経症状患者を8例確認したが、各国ともキノホルム製剤の使用法が日本とまったく違い、中毒患者多発の可能性はまずない」と語った。(朝日新聞報道)

8.13 京大・井上、スモン患者から分離したウイルスでマウスがスモンと似た症状を示して死んだという実験結果を発表(毎日新聞報道)。

8.24 スモン調査研究協議会、治療予後部会第1回研究会開催。

・ 新大・椿、東大・井形、欧州諸国におけるSMONとキノホルムの調査結果の中間報告をし、SMONが本邦のみで多発した理由は、各個人当りのキノホルム使用量、使用期間の差で説明が可能であると思われると述べる。

・ 岡大第一内科・小坂、岡山・井原地区のスモンの発症とキノホルム投与との間には関係がないことを強調、又、小坂、島田は、井原地区スモンの再燃とキノホルム投与の間に積極的な因果関係を証明しえなかったと報告。

1 0.15 第2次スモン訴訟、第1回口頭弁論開かれる。被告側はスモンとキノホルムとの因果関係および過失責任について争うことを明らかにする。原告はカルテなどの証拠提出を申請する。

1 0.17 大阪支部が結成される。

1 0.19 千葉支部が結成される。

1 1.5 第3次スモン訴訟、19都道府県155名の患者が、国・製薬会社(医師は対象外)を相手どり、総額77億5,000万円の慰籍料請求の訴えを、東京地裁におこす。

1 1.16 福岡支部が結成される。

1 1.21 静岡支部が結成される。

1 2.12 福島支部が結成される。

1 2.14 第4次スモン訴訟、失明した少年や自殺者・死亡者の遺族ら4家族7名が、国・製薬会社・医師・病院を相手どり、総額2億円の慰籍料請求の訴えを、東京地裁におこす。

1 2.16 全国スモンの会、支部代表者会議。

年	医 学 事 項		行 政 事 項	社会および患者の 動向に関する事項	備 考 (公害・薬害・医療事故等)
	患者発生の経過	調査研究の経過			
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 名犬・祖父江、スモンの予後調査を報告。982例中約7割は何等かの意味で改善しているが、全治例は5.1%であり、死亡例は10.6%あると発表。 9.4 東大・中江、山本、井形、“Lancet”に、戸田蔵地区の疫学的研究の結果を原著として発表。 9.4 スウェーデン、ウプサラ大学病院のOsterman、“Lancet”に、エンテロビオフォルム1.5gを1カ月連用した24才の男性にスモンと同じ神経症状が見られたと報告。 9. 新大・椿ら、SMONはキノホルム中毒であるとの結論に至った経過を回顧し、これを「内科」誌に発表。 9. 業界誌「新薬と治療」(山之内製薬発行)、第155号にて「スモンを探る」を特集。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 甲野、「現時点でキノホルム説が最有力の説である」と記す。 ・ 豊倉、高須、キノホルムがSMONの原因と考えて、大きな誤りはないと考えると論述。 ・ 井上、外国にスモンが見られないこと、日本のスモン患者の14.8%が「キノホルムと関係ない」ことをもって、スモンを「キノホルム中毒で説明することはもはや不可能」とし、ウイルス説を主張。 ・ 祖父江、外国では日本でいうスモン症例が他患者として取扱われている可能性が若干あると記述。 9.6 スモン調査研究協議会の甲野・重松・黒岩・祖父江、井原を訪れ、市民病院で患者5人を診察、井原スモンの会会長から事情を聞く。 9.7 甲野ら、岡山大・小坂、平木両内科に入院中の患者計7人を診察。 甲野は午後記者会見し、井原市民病院の患者5人のうち2人、小坂内科の5人のうち3人は「スモン患者としては疑問の残る患者だった。」とし、さらに疫学的調査が必要と語る(8日付 山陽・中国新聞) 9.25 ロンドン、Hospital for Tropical DiseasesのTerry、1969年4月以来下痢の治療のためメキサフォルムないしエンテロビオフォルムを飲んだ33才のパイロットが服用の度に顔や上肢に知覚異常を感じ、白血球が増加したと、“British Medical Journal”に報告。 9.30 スモン調査研究協議会疫学部会開催、昨年9月以降の患者発生状況の資料などを検討した結果、キノホルム説は確定的と発表。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 別途に行なわれた「疫学研究会」にて、東大・中江ら研究発表。島田のキノホルム説否定の報告に東大・山本 			

らから強い批判あり。

- 1 0. 9 京大・井上ら、「日本医事新報」誌にて、スモン患者の髄液はB A T—6細胞に対し、細胞変性効果があると発表。血清学的検査より、リンパ球性髄膜炎のなかにスモンと同一の病因によるものがあると推定。キノホルムはスモン発症の修飾因子であると主張。
- 1 0. 1 0 甲野「最新医学」にて、スモン病因の疫学的追究の経過に関する総説を発表。「感染症と思われたものが、実は薬剤中毒（＝医療病）であったということになりそうである」とむすぶ。
- 1 0. 1 2 スモン調査研究協議会保健社会学部会飯島ら、7月の井原調査の結果をまとめ「スモンに関する保健社会学的研究 第二年度報告（その1）」として協議会に提出。井原のスモン多発は市民病院とその指導にあたった岡大第一内科の治療方針が原因であると思われると指摘し、問題解決をおくらせている要因として、岡大医学部・井原市内開業医・スモン調査研究協議会の医師らの批判の欠如や市・県・国のスモン対策の遅れを批判。
- 1 0. 1 6 ロンドンの神経研究所Cavanagh, “Lancet”に中江らの論文に関してコメントを寄せ、キノホルム中毒とオルトクレジル燐酸中毒との類似性を指摘。キノホルム剤の使用に注意を促す。
京大・井上、同誌に、スモン患者から分離したウイルスをマウスに接種したところ、麻痺をおこして死亡したと報告。
- 1 0. 1 6 新大・椿ら、「日本医事新報」誌にて、キノホルム服用者の神経症状を検討した結果、キノホルム剤服用とスモン発症との関係がさらに明確になったと発表。また、外国ではキノホルム剤による神経障害の報告は、1966年に初めてなされていると紹介。
- 1 0. 1 9 スモン調査研究協議会微生物部会、第2回マイコプラズマ・細菌研究会開催。
・ 理化研・光岡、サルにキノホルムを投与したところ、腸内細菌叢に著しい変化が認められ、スモン患者のそれと一致したと発表。
・ 国立公衆衛生院・中谷ら、スモン患者で観察された腸内細菌叢の異常状態の一部はキノホルムの直接効果と考えても矛盾しないと発表。
・ 久留米大・中村ら、スモン患者の舌より高率にマイコプラズマを分離と報告。
- 1 0. 2 7 井上ら、日本ウイルス学会（東京）にて、スモン患者の髄液をマウスに接種し、病理解剖を行なったところ、脊髄にスモン患者と同質の変性脱髄病変が認められたと発表

年	医 学 事 項		行 政 事 項	社会および患者の 動向に関する事項	備 考 (公害・薬害・医療事故等)
	患者発生の経過	調査研究の経過			
		<p>1 0.3 0 第30回日本公衆衛生学会(東京)</p> <ul style="list-style-type: none"> 東大・飯島、片平ら、井原地区スモンの調査結果を報告。 大阪医大・山本、吉田ら、スモンを原因がまったく不明の疾病ととらえ、リハビリテーションの方向づけをするために行なった調査結果を報告。 <p>1 1.6 札幌医大・金光ら、イヌに乳化剤CMCを配合したキノホルムを与えると、スモン様症状が発症しやすくなることを確かめ、「医学のあゆみ」誌に発表。</p> <p>1 1.6 祖父江ら、「日本医事新報」誌にて、スモン発症には一日服用量、服用期間の組み合わせが重要であり、ことに一日服用量の影響が大きいと指摘。</p> <p>1 1.1 3 デンマークOdense 大学病院のKjaer sgaard、21才の女性に胃腸炎の治療のため、エンテロビオフォルムを14時間に総量4g投与したところ、健忘症を呈し、これは以前Kaeser がエンテロビオフォルムの中毒として報告したものと一致すると“Lancet”に報告。</p> <p>1 1.2 7 岡大・立石、大月ら、ネコにキノホルムを投与し、スモンとほぼ同一の病理所見を得たと「医学のあゆみ」誌に発表。</p> <p>1 2.4 Lancet の編集者、スモンとキノホルムに関する日本内外の調査研究及び行政措置を紹介。オーストラリアでは4例のスモン様患者(いずれもキノホルム剤を長期大量に服用)が出ており、薬効評価委員会はキノホルム剤の服用は医師が処方した場合にのみ限るよう勧告を出したことを報告。スモンとキノホルムとの関係を否定する説も出ているが、神経疾患の原因が不明な時、キノホルム剤服用の有無は調べる必要ありと結ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 岡大・立石ら、同誌にイヌ・ネコ・サルへのキノホルム投与実験結果を報告。キノホルム剤は日本でのスモン発生の原因かつ促進因子であると結論。 <p>1 2.1 1 岡大第一内科・三亀、小坂ら、“キノホルムを服用することなく”46年5月に発病した“定型的なSMON症例”を「医学のあゆみ」に発表。</p> <p>1 2.1 4 スモン調査研究協議会 治療予後部会第2回研究会開催。</p> <ul style="list-style-type: none"> 祖父江、スモンの予後調査結果(その2)を発表。 			

- ・ 楠井、臨床班員 22 名の調査を集計し、45 年 9 月以降神経症状発現スモン患者は 17 例、うちキノホルム服用「なし」は 8 例（すべて小坂班員）と報告。
- ・ 腹部症状ならびに神経症状の治療法を班員間で検討。
- ・ 府中病院・花籠、川村、同病院神経内科受診のスモン患者 45 例中 8 例が「潜在患者」であったと報告。

1 2.1 5 スモン調査研究協議会 キノホルム部会 第 2 回研究会開催。

- ・ 動物実験を中心に 22 演題報告。
- ・ 新大・椿、星、キノホルム剤服用後視力障害のみを主徴とした一例を報告。
- ・ 研究発表後の討論で、スモンとキノホルムとの因果関係につき、部会として結論を出すべきであるとする意見が強く出されたが、江頭部会長は、「協議会はそういう要請を受けていない。動物実験がまだ残っており、時間と費用の許す限り出来ることをしておきたい」として、結局結論については、時間切れのまま保留となった。

1 2.1 6～17 スモン調査研究協議会 病理部会開催

スモンの疑いのある解剖例約 140 の組織標本を検討。

- ・ 岡大病理・小川、堤ら、スモン発症までのキノホルム用量は、中江らの最低発症曲線によく一致すると思われると報告。また、剖検例における骨格筋の病変は、distal（末梢部位）ほど強いと発表。

1 2.1 8 イギリス・Cardiff の Spillane、日本に一月滞在し、スモンに関して見聞したことを“Lancet”に報告。帰国後に、旅先でエンテロビオフォルムと思われる錠剤を服用し神経症状を呈した患者に会い、もし日本でスモン患者を診ていなかったら、ウイルス感染や多発性硬化症あるいは脳虚血発作を疑っていただろうと述べる。

年	医 学 事 項		行 政 事 項	社会および患者の 動向に関する事項	備 考 (公害・薬害・医療事故等)
	患者発生の経過	調査研究の経過			
1972 (昭47)		<p>1.1 ロンドン Charing Cross Hospital の Rose . "Lancet" にて、スモンに関連して、先に Terry が英国における "最初の症例" として報告した例 (Br. med. J 1971. 9. 25) 及び Spillane の報告例 (Lancet 1971. 12. 18) は日本におけるスモンの臨床症状と異なっているとし、NON-S.M.O.N. と題して発表。</p> <p>1.8 ロンドン神経研究所の CaVanagh、スモンとキノホルム剤との関係は、"バラ色病" と塩化水銀入りの歯磨粉との関係に類似していると "Lancet" に報告。</p>	<p>1.1 2 47年度予算案、一般会計1兆4704億円と決定。スモン、ペーチェット病など特定疾患対策に5億3千万円。</p> <p>3.1 4 齊藤厚相、閣議後の記者会見にて、スモン患者は公害病患者に準じた扱いにすべきと思うと述べる。</p> <p>3.1 4 岡山県井原市、定例市議会にて、第2次スモン訴訟の被告の元井原市民病院医師に100万円の弁護士料を出すことを決定。</p> <p>3.1 6 衆院社労委で、スモンに関する質疑応答がなされる。齊藤厚相は、治療費の公費負担・患者認定機関の設置などにふれ、またキノホルムについて国の責任を否定する</p>	<p>3. 5 愛媛支部が結成される。</p> <p>3.1 0 第5次スモン訴訟、35都道府県405名の患者が、国・製薬会社(医師は対象外)を相手どり、総額202億5千万円の慰労料請求の訴えを、東京地裁におこす。</p> <p>3.1 2 兵庫県で、「カルテの公開を」との遺書を残し、スモン患者自殺。(男 23才)</p> <p>3.1 3 全国スモンの会々長、スモン調査研究協議会の総括に関連し、声明を発表。原因が究明されても、患者の生活保障、治療法の確立、認定機関の設置など問題は山積と指摘。</p>	<p>1.7 チッソ本社で坐りこみ中の新認定水俣病患者、チッソ労働組合連絡協議会、一議長と面会のためチッソ石油化学を訪問。一議長上京中のため待っている中、同社工場従業員約200人により突然襲われ、患者たち負傷。</p> <p>1.1 6 日教組教研集会にて、宮崎県岩戸小学校・一教諭、同県高千穂町の土呂久鉦山跡近くに公害病患者多発の事実を報告。</p> <p>1. 新認定水俣病患者とチッソの話合いは、実質的にまったく進まず、度重なる両者の衝突により怪我人の出現ふえる。事態を懸念した水俣市長や熊本県知事上京し、それぞれ25日と26日に、大</p>

1.15 オーストラリア,
Royal North
Shore Hospital
のSelby、1967年
以降、オーストラリアで
6名のスモン患者が見出

答弁を行う。
3.22 衆院予算委で、ス
モンに関する質疑応答が
なされる。

され、(57~67才、男1名、女5名)いずれも、エンテロビオフォルムを一日
0.5~1.5g、2週~14カ月に亘って服用していたと“Lancet”に原著として
発表。

- イギリスのSpillane、同誌にて、1月1日号のRoseの説に反論。
- 1.22 鹿児島大・井形、オーストラリアで6例のスモン患者が発見されたことを
「医学のあゆみ」誌に紹介。
- 1.29 京大ウィルス研・中村、井上、昨年10月にウィルス学会で発表したマウス
実験の結果を原著として“Lancet”に発表。
- 2.12 徳島大・松本、ネズミを用いてキノホルムが睡眠に与える影響を調べた結果、
キノホルムは体内のセロトニンを減少させると考えられると「医学のあゆみ」に発
表。
- 2.19 スモン調査研究協議会微生物部会、第3回研究会開催
 - 国立公衆衛生院・中谷ら、キノホルム投与中止1年後のSMON患者の腸内細菌
叢は、健康人のそれに近づいた傾向が明らかであったと報告。
 - 病理部会、第2回研究会開催
 - 東大医科研・斉藤、キノホルムの障害作用を農薬が増強していると報告。
 - 岡大・小川、堤ら、全国のスモン剖検例の神経系以外の調査を行ない、舌病変と
キノホルム投与との関係が示されたと報告。

石環境庁長官と会談。患
者たち、29日に大石長
官に斡旋を正式依頼。

- 2.1 四日市訴訟結審。
- 2.23 新認定水俣病患者
とチッソとの本格的自主
交渉、大石環境庁長官の
なかだちで、この日より
はじまる。

3.3 富山の「」医師、
兵庫県生野町に、三菱金
属鉱業生野鉱業所による
カドミウム汚染で4人の
イタイイタイ病患者がい
ると発表。

「」神戸大教授は
これを否定。

- 3. 大分県の日本鉱業佐賀
関製錬所付近の住民に高
いがん死亡率のみとめら
れること、「」徳島
大教授により報告さる。
粉じん中のヒ素が原因と
のこと。

年	医 学 事 項		行 政 事 項	社会および患者の 動向に関する事項	備 考 (公害・薬害・医療事故等)
	患者発生経過	調査研究経過			
		<p>両部会の合同研究会にて</p> <ul style="list-style-type: none"> 京大・井上ら、ウィルスによるマウスの発症実験やウィルスワクチンの試作の経過等について報告。 <p>これに対して、予研・多ヶ谷ら、阪大・奥野ら、北大・飯田ら、名大・松岡らから「井上ウィルス」の追試の経過ないし結果が報告され、井上らを積極的に支持するような結果は得られていないことが示された。</p> <p>また、京大・東は、45年6月に発表した「スモンウィルス」を、その後の電顕的観察で確認できなかったとして取り消した。</p> <p>2.27 スモン調査研究協議会</p> <p>治療予後、疫学・保健社会学3部会合同研究会開催</p> <p>治療予後部会、第3回研究会</p> <ul style="list-style-type: none"> 東大・井上、豊倉ら、クロラムフェニコールによる視神経炎の症例を報告。 鹿大・井形、鹿児島県で46年11月から47年1月にかけて検診を行なったところ、従来の届出患者45名中6名が臨床的な診断基準からはずれており、また、新たに疑い例を含め20名が発見されたと報告。 岡大・小坂、鳥田ら、45年10月以降も岡山県を中心にスモン患者が17例出ており、うち15例は「詳細な検索を実施したがキ剤投与歴は全く認められなかった」と報告。 <p>これに対して、再燃や緑舌など臨床症状の有無等をめぐって質疑応答がされ、小坂は「我々が提示しているスモンはキノホルム中毒では説明ができない」と述べた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 岩手医大・鈴木、高圧酸素療法は知覚・運動障害の改善をもたらすと報告。 岡大眼科・奥田ら、井原市民病院のスモン患者のキノホルム内服状態と視力の経過について検討した結果、キノホルムを大量に投与されたもの程、視力低下が強いと報告。 名大・祖父江ら、スモンの予後調査(その3)を発表。全体的にとらえた改善率は6~12カ月で73.5%と 		<p>3. 水俣病患者、40年以降にも数百人発生のこと、熊本大第二次水俣病研究班の調べで明らかとなる。</p>	

最高を示し、その後は停滞する傾向があること、就労率は12カ月までで70%であること、治療状況は入院15.6%、外来60.8%、非受療は21.1%であること等を報告。

- ・ 東北大・杉山ら、全国のリハビリテーション実施状況とその阻害因子について報告。

疫学部会、第2回研究会

- ・ 国立公衆衛生院・重松ら、本年2月26日現在のスモン患者は、合計9131名（うち確実例5770名）であると報告。
- ・ 東大疫学・山本、中江、全国のスモン患者2456名のうち、神経症状発症6カ月前にキノホルムの服用「あり」は75.1%、「確実になし」は14.6%（残りは「ないらしいが不確実」）であったと報告。
- ・ 札幌医大・笠井、金光ら、単位体重当りキノホルム剤総投与量がスモン発症のDose-responseに影響し、60才未満の女性に発症率が高いのは、体重によって説明できると報告。

保健社会学部会、第1回研究会

- ・ 東大保健社会学・飯島、片平ら、井原地区スモンの多発は、井原市民病院と岡大第一内科が、スモンを感染症と想定し、患者を「早期診断」「早期隔離」して、キノホルムを長期大量に投与したことが大きな要因と思われると報告。また、問題延引の要因として、井原市内開業医、岡大医学部、スモン調査研究協議会のあり方を批判。

これに対し、「4割以上の症例は神経症状発症後市民病院に来ている」「データに関して、患者をみることにしても、私どもが門を閉ざしたということは一度もない」等の反論があった。

- ・ 同・飯島、高木ら、井原地区では、キノホルム説が出たあとも、なお、強く感染説が主張されていることにより、患者およびその家族は、依然として地域から疎外され続けており、患者たちは、これに抗して運動を展開していると報告。
- ・ 合同研究会終了後、治療予後部会はスモンの治療指針を作成。

2.28 スモン調査研究協議会キノホルム部会、第3回研究会開催

- ・ 名大・祖父江ら、スモンの前駆腹部症状は患者の9割近くにみられ、その内容からは、むしろ神経症状の一部をなすと考えられると報告。
- ・ 東大・田村ら、ガスクロマトグラフィーを用い、肝・腎中キノホルムの微量定量が可能となったと報告。

年	医 学 事 項		行 政 事 項	社会および患者の 動向に関する事項	備 考 (公害・薬害・医療事故等)
	患者発生の経過	調査研究の経過			
		<ul style="list-style-type: none"> • 岡大・緒方、大月ら、ネコ、マウス、ラット、イヌに標識キノホルムを投与、生体内の分布状況を調べた結果を報告。 • 岡大・大月、立石ら、純系ビーグル犬は雑犬の3～4倍のキノホルム投与により、中毒症状を示したと報告。 • このほか、東歯大・上田ら、国立衛試・池田ら、予研・江頭ら、阪大・高橋等から、マウス、ニワトリ、ウズラ、カニクイ猿等を用いて行なった実験結果が報告された。 <p>2.29 キノホルム部会、第3回研究会総括討論行なわる。</p> <p>部会員間で「キノホルムによってスモンが起こる」ことを確認。他部会メンバーを加えての「スモンの原因としてのキノホルム」の討論では、疫学(重松)、治療予後(楠井)、微生物(甲野)各部会より報告があり、岡山を中心とした「新患」の問題や、Dose responseの成否、プラスアルファ要因の有無などが話された。</p> <p>3.13 スモン調査研究協議会総会開催</p> <p>スモンの病因に関しては、「……以上述べた疫学的事実ならびに実験的根拠から、スモンと診断された患者の大多数は、キノホルム剤の服用によって、神経障害を起こしたものと判断される」と総括。</p>			

スモン問題年表 訂正・追加

昭和30年—46年3月

注 ・アンダーラインを含む項目の場合は、
アンダーライン部分が追加分

調査研究の経過

1965 (昭40)	10 脳性麻痺研・松山、「日本臨床」にて、「腹部症状に続発せる麻痺患者」の2剖検例を報告。脊髄病変の状態からは、系統的変性疾患、中毒、代謝障害が考えられるが、疫学・臨床的見地からは、栄養欠乏症と考えるのが最も妥当と記す。
1969 (昭44)	9.2 [中沢ら、宮原らの研究発表は、総会の時でなくその後の班会議で報告されたもの。 (甲野)] 12 東大脳研・白木、小田、最新医学SMON特集の中で、7剖検例を報告。神経病理学の立場からすれば、SMONはわが国に特有の中毒性ないし代謝性疾患に属するとみられると記す。
1970 (昭45)	8.6 新大・椿、新潟県厚生部を通じて厚生省に対し、「患者の服用歴調査などから、キノホルムがスモンの原因である可能性が高い」と口頭で報告。 9.5 新大・椿、日本神経学会関東地方会にて、SMONの発生とキノホルム剤服用とは関連があると発表。
1971 (昭46)	2.26 キノホルム説→キノホルム 3.1~2 疫学、臨床両班の報告中、「キノホルム未服用のスモン患者も確実に存在」→「キノホルム未服用の『確実なスモン』患者も存在」

患者発生の経過

1955 (昭30)	・ 第61回日本内科学会シンポジウム「非特異性脳脊髄炎症」の全国例年次別集計によれば、 <u>下痢・腹部症状に気づかなかつた例では、28年以前に数例、29年以降少数ではあるが毎年数例発病次第に増加がみられた。</u>
1962 (昭37)	・ 岡山県井原市に男1、女1計2名患者が発症し、以後42年に急激に増加。
1963 (昭38)	・ 岡山県井原市の近隣地芳井町に患者2名初発。
1967 (昭42)	・ 岡山県井原市で患者数爆発的に急増(男5、女25、計30名)し、また芳井町でも11名となり、両地区とも増加の傾向あり。(笠岡保健所)
1968 (昭43)	・ 岡山県井原市の患者発生数は、男26、女40、計66名。芳井町では、15名となる。(笠岡保健所)
1969 (昭44)	・ 岡山県井原市では、男14、女37で計51名、芳井町では、男2、女15、計17名(笠岡保健所) 両地区とも6~7月以降激減(井原市衛生課およびら)
1970 (昭45)	・ 岡山県井原市の新患発生は、1.5.7.9.10月に各1名、計5名ありと岡大ら報告。(医学のあゆみ)

行政事項

<p>1967 (昭42)</p>	<p>1 0.2 0 岡山県井原市の井原市民病院病院長、井原市長の要請のもとに「いわゆる『スモン病』について」のパンフレットを作成。井原市と隣接芳井町に全戸配布。「発病に 関与しているのはビールスと推定」という一文を含む。</p>
<p>1968 (昭43)</p>	<p>1 2.5 井原市、「いわゆる『スモン病』の対策について」の陳情書を作成し、岡山県と 政府に提出。井原市長、上京。地元出身 代議士と逢い、スモン予算の件など確 約をとる。</p>
<p>1969 (昭44)</p>	<p>3. 公明党 議員、井原市を訪問。 3.1 1. 岡山県井原市の定例市議会にて、スモンに関連する詳しい質問あり、3月10日 の市広報で岡大 内科 助教授の<感染説公示>があったため。 3.1 5 井原市、スモン病に罹患した市職員のとり扱いについて市条例を改正し、結核患 者なみとする。 3.1 5 井原市、定例市議会にて、スモン病対策の確立について決議。 4. 厚生科学特別研究費500万円をもって"全国のスモン患者の実態ならびに病原に関 する研究"にあたる。(スモン研究班が発足する。<u>班長甲野礼作予研ウイルス中央検査 部長。)</u> 4.5 井原出身の 代議士、訪井し、スモン対策に本腰入れると発言。43年12 月5日の井原市長陳情を受けたもの。 4.2 6 厚生省 課長補佐一行、現地調査のため井原地区などを訪問。 6.1 9 井原市、定例市議会にて、スモン病特別委員会設置決議される。 6.2 7 井原 市長上京し、「重症度スモン病患者の『看護』の給付等に関する陳情」 書を政府に提出。</p>
<p>1969 (昭44)</p>	<p>7.3 井原市 長、NHK主催の「スモン病について厚生大臣との対談」に出演。 9.2 厚生省科学特別研究費と、科学技術庁特別研究促進調整費によって、スモン調査研 究協議会が結成され、第1回総会が岡山で開かれる。<u>会長は甲野礼作氏。スモン研究班 は解散。)</u> 9.3 厚生省村中公衆衛生局長やスモン調査研究協議会員ら、岡山県内の多発地を視察。</p>
<p>1970 (昭45)</p>	<p>2.2 井原市市議会、「スモン病治療病院の経営赤字に対する特別措置に関する陳情」書 を作成し、政府に提出。 3.3 0 衆院予算委員会でスモン対策をとりあげる。 4.6 参院予算委員会でスモン問題に関して質疑が行なわれる。 6.1 9 井原市市議会、スモン病撲滅に取りくんだ市民病院の全職員に対する感謝決議を 行なう。</p>

<p>1970 (昭45)</p>	<p>9.7 厚生省、薬事審答申に基づきキノホルムの販売一時中止と、使用一時見合せを全国に指示。</p> <p>9. 井原 〓市長、定例市議会で、スモンのキノホルム原因説に関し、岡山県下の多発はキノホルム説では説明できぬと答弁。</p> <p>10.9 厚生省薬務局、「キノホルムに関する調査及び研究の概要」をまとめ、発表。キノホルムの神経毒性はみとめながらも、キノホルム以外のわが国に特有な因子の存在を想定しなければならないという趣旨。</p>
-----------------------	---

社会および患者の動向に
関する事項

1971 (昭46)	3.30 全国スモンの会など、難病友の会連絡会を結成する。
---------------	-------------------------------

スモン調査研究協議会研究報告書

№. 7

昭和46年度保健社会学部会研究報告

昭和47年3月25日発行

発行所 スモン調査研究協議会
東京都品川区上大崎2-10-35
国立予防衛生研究所内

代表者 甲野礼作

印刷所 瑞穂印刷産業有限公司
渋谷区幡ヶ谷3-69-5